所有からみた長崎県対馬のコヤ立地に関する研究

A study on the location of storehouse from the aspect of ownership in Tsushima Island, Nagasaki Prefecture

小林 秀輝* 藤田 直子**

Hideki KOBAYASHI Naoko FUJITA

Abstract: In this research, we aimed to analyze the locations of storehouses from the perspective of ownership, and to clarify the location profile of storehouses on Tsushima Island, Nagasaki Prefecture, for villages not previously investigated. The study area was Tsushima, a detached island in Nagasaki Prefecture. The areas surveyed surveyed were five villages, namely Tanohama, Waita, Yokoura, Shimobaru, and Kashine. As a result of the survey, we were able to clarify the location and ownership of storehouses in the surveyed settlement. Various storehouse ownership forms were seen, such storehouses owned near the main building and those located far away. In response to the survey results in this study, it is inferred that storehouses tend to be built on unusable land around the village. It was also inferred that the location of storehouses is affected by land use and land ownership in the village. The results of this project contribute to the development of storehouse research in Japan and abroad, emphasize the value of Tsushima's disappearing storehouses, and also contributes to the preservation and utilization as a cultural property of cultural landscape elements.

Keywords: storehouse, location, ownership, Tsushima Island

キーワード: 倉, 立地, 所有, 対馬

1. 研究の背景と目的

対馬は九州と朝鮮半島の間の朝鮮海峡に浮かぶ長崎県の離島である。この対馬の伝統的建築物の一つに、現地で「コヤ」と呼称される倉がある(以下コヤで統一する)。このコヤは、穀物や味噌、布団や食器等の家財道具の保管に用いられ、軒下空間も野菜の乾燥や農機具の保管等に活用されている。対馬のコヤの特徴として、高床の板倉であること¹⁾、扁平な断面を持つ平柱が外構に使用されていること²⁾、一部に石屋根が見られること³⁾⁴⁾、集合してコヤを設ける群倉立地(図-1)が見られること⁵⁾の4点を挙げるができる。このコヤは上島と下島で構成される対馬の全域に分布している。

これまでの対馬におけるコヤをめぐる保全の動向をみると、長崎県や対馬市による有形文化財指定⁶⁾、まちづくり景観資産指定⁷⁾、移築保存⁸⁾などの実態があるが、いずれも単体のコヤが対象であり、特に石屋根倉庫の保全に力が注がれていた。その反面、建築物単体に留まらず対馬の集落景観全体を対象にした評価や価値付けは積極的に行われてこなかった。しかしながら、2004年に始まった重要文化的景観の選定制度などにより、地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地が価値付けられるようになったことから、対馬のコヤやそれを育んだ風土によって形成された集落景観そのものにも関心が注がれる社会的動向が醸成されつつある。

対馬のコヤに関する研究や調査報告には、構法に関するもの¹⁰⁾、石屋根に関するもの²⁾³⁾⁴⁾、群倉に関するもの¹⁰⁾¹¹⁾、景観に関するもの¹²⁾、コヤの所有に関するもの⁵⁾¹¹⁾¹³⁾がみられる。群倉はひとつの特徴であるが、コヤの立地は群倉(群倉立地)だけではなく一棟一棟がバラバラに離れて建っている場合(単独立地)もある(図-1)。これまでのコヤの研究は群倉を対象としたものが主であり、その成立要因として防火¹¹⁾や聖域¹⁵⁾などが挙げられてきた。しかし、コヤの立地については所有と研究の余地が残されており、特にコヤの単独立地の実態については明らかにされていない。

図-1 コヤの立地形態の模式図

以上を踏まえ本研究では、群倉立地と単独立地のコヤに対して、主屋とコヤの位置から集落内部におけるコヤの立地の特徴を土地利用との関係から明らかにすることを目的とする。

本研究の成果は、対馬におけるコヤ研究の流れのなかで、コヤ単体の価値だけではなく、それを育んだ風土によって形成された集落景観そのものを評価し、文化的景観として価値付けるための一助となるものと考えられる。それを通して、減少が続く対馬のコヤが保全・活用されることが期待される。

2. 研究の方法

(1) 研究対象地

研究対象地は、長崎県対馬である。本研究では群倉の定義を「屋敷地外に連続的に立地する3棟以上のコヤの集合」と定めて調査を進めた。また、既往研究で主屋とコヤの所有位置を調べたもの⁵⁾¹¹⁾¹³⁾も考察に加えて検討した。

調査を実施した集落は、上県町田ノ浜集落、豊玉町和板集落、豊玉町横浦集落、巖原町下原集落、巖原町檜根集落の5集落(図-2)とした¹⁶⁾。これらの集落ではこれまで主屋とコヤの所有を紐付ける調査は行われていない。これらの集落のうち、田ノ浜集落¹⁷⁾と和板集落と下原集落ではコヤの単独立地がみられ、横浦集落と檜

*九州大学大学院芸術工学府

**九州大学大学院芸術工学研究院

根集落ではコヤの群倉立地がみられる。横浦集落では海岸沿いに、檜根集落では主屋から道を挟んだ集落中央部にコヤが集合している。

調査結果を表-2 にまとめた。以下では集落毎にコヤの立地と所有について詳述した。

コヤの単独立地がみられる田／浜集落内に残存するコヤの棟数は15棟であった。コヤが建つ土地は、すべてのコヤにおいて各々のコヤの所有者が有する土地であった。コヤの所有棟数は1棟所有が3例(名)で、2棟所有が6例(名)であった。

本集落におけるコヤの立地と所有関係を図化したものが図-3である。本集落における特徴として以下の点が挙げられた。まずコヤの立地について、居住域の周縁部に分散して立地しているという特徴がみられた。居住域の外側は北西に海とその内側の海浜と松林に囲まれた共有地、北東に森林、南に耕作地が広がっており、コヤは居住域とそれらの土地利用との境目に立地していた。

対象集落	日程	調査内容	ヒアリング 対象人数	属性
田ノ浜	2018年8月17日-21日	コヤの分布と所有の確認・ヒアリング	2	集落住民
和板	2018年10月8日-10日	コヤの分布と所有の確認・ヒアリング	1	集落住民
横浦	2018年10月8日-10日	コヤの分布と所有の確認・ヒアリング	2	集落住民
下原	2018年8月17日-21日	コヤの分布と所有の確認・ヒアリング	1	集落住民
棚根	2018年9月22日-23日	コヤの分布と所有の確認・ヒアリング	1	集落住民

項目(単位)	田ノ浜	和板	横浦	下原	檜根
コヤの棟数(棟)	15	9	20	12	16
コヤの複数棟所有の例(例)	6	0	2	0	7
コヤの立地(例)	主屋の	2	7	9	3
	近隣	2	2	0	3
	主屋と離れている	11	0	10	6

次にコヤの所有地について、所有者の主屋とコヤの位置は一律ではなく、主屋に隣接する土地や道向かいにコヤを所有しているケースは 40%(6 例)確認された。主屋の敷地から 15m～100m ほど離れた土地にコヤを所有しているケースが 60%(9 例)確認された。

また、「コヤは目の届く範囲で離して持つ」という解釈が聞き取りによって把握された。

コヤの単独立地がみられる和板集落内に残存するコヤの棟数は9棟であった。コヤの所有棟数は1棟所有が9例(名)で、2棟以上所有する例はみられなかった。

本集落におけるコヤの立地と所有関係を図化したものが図-4である。本集落における特徴として以下の点が挙げられた。まずコヤの立地について、居住域が東西の山際に分かれているのに対してコヤは中央部の道沿いに配置されているものが多かった。次にコヤの所有地について、所有者の主屋とコヤの位置は一律ではないものの、主屋に隣接する土地や道向かいにコヤを所有しているケースが100%(9例)で、樫根集落と同様に主屋の敷地から離れた土地にコヤを所有しているケースは確認できなかった。コヤを持たない主屋も存在したが、大多数の主屋とコヤに所有関係が認められた。

コヤの群倉立地がみられる横浦集落内に残存するコヤの棟数は20棟であった。コヤの所有棟数は1棟所有が16例(名)で、2棟所有が2例(名)であった。主屋が不在で所有関係のないコヤが1棟確認された。

本集落におけるコヤの立地と所有関係を図化したものが図-5である。本集落における特徴として以下の点が挙げられた。まずコヤの立地について、北東部の湾沿いにコヤの群倉立地を2箇所確認できた。一つは湾と山の斜面の間の場所に6棟、もう一つは湾と海に挟まれた場所に6棟あり、いずれも狭いエリアに集合していた。次にコヤの所有地について、所有者の主屋とコヤの位置は一律ではないものの、主屋に隣接する土地にコヤを所有しているケースが45%(9例)確認された。主屋の敷地から50m~100mほど離れた土地にコヤを所有しているケースが50%(10例)確認された。コヤを持たない主屋も存在したが、大多数の主屋とコヤに所有関係が認められた。

コヤの単独立地がみられる下原集落内に残存するコヤの棟数は12棟であった。コヤが立つ土地は、すべてのコヤにおいて各々のコヤの所有者が有する土地であった。コヤの所有棟数は1棟所有が12例(名)で、2棟以上所有する例はみられなかった。

本集落におけるコヤの立地と所有関係を図化したものが図-6である。本集落における特徴として以下の点が挙げられた。まずコヤの立地について、居住域と耕作地の境界に沿うように立地しているという特徴がみられた。居住域の外側は北に森林、南に耕作地が広がっており、耕作地の南に東西方向に川が流れている。コヤは居住域と耕作地との境目に立地していた。次にコヤの所有地について、所有者の主屋とコヤの位置は一律ではないものの、主屋に隣接する土地にコヤを所有しているケースが 50%(6 例)確認された。主屋の敷地から 20m~80m ほど離れた土地にコヤを所有しているケースが 50%(6 例)確認された。コヤを持たない主屋も

図-3 田ノ浜集落におけるコヤの所有関係

図-4 和板集落におけるコヤの所有関係

存在した。

5) 樫根

コヤの群倉立地がみられる樫根集落に残存するコヤの棟数は16棟であった。コヤが立つ土地は、すべてのコヤにおいて各々のコヤの所有者が有する土地であった。コヤの所有棟数は1棟所有が14例(名)で、2棟所有が1例(名)であった。

本集落におけるコヤの立地と所有関係を図化したものが図-7である。本集落における特徴として以下の点が挙げられた。まずコヤの立地について、居住域の中央部にコヤの群倉立地を確認で

きた。居住域の外側は北西に耕作地、北東・東・南に森林が広がっており、コヤは居住域の中央に立地していた。次にコヤの所有地について、主屋の道向かいにコヤを所有しているケースが68.8%(11例)確認された。主屋とコヤはほぼ正面に向かい合って建てられており、常に所有者の目の届く範囲にコヤがあるという状態が形成されていた。

また、本集落におけるコヤの立地の特徴として、コヤが立地している土地が河川に沿った場所であるということが明らかになった。この場所は現在の土地利用では道路に属しているが、元来は河川

図-5 横浦集落におけるコヤの所有関係

図-6 下原集落におけるコヤの所有関係

であり、現在暗渠化されており道路として使用されていた。従って、コヤが建てられた当時は道路沿いではなく河川に沿って川越しに建てられたものであることが分かった。

4. 考察

(1) 集落内におけるコヤの立地と「際」

調査対象の5集落におけるコヤの立地や土地利用との位置関係をまとめると、田ノ浜集落では居住域の西側から海と居住域とを隔てるようにコヤが立地しているという特徴がみられ、和板集落

では川沿いと森林や耕作地を隔てるようにコヤが立地しているという特徴がみられ、横浦集落では田ノ浜集落と同様に居住域と海とを隔てるようにコヤが立地しているという特徴がみられ、下原集落では主に耕作地と居住域を隔てるように弧状にコヤが立地しているという特徴がみられ、檜根集落では居住域の中央にコヤが集中しているが、現在の中央部の道が暗渠化された川であることを考慮すると、現在のコヤ立地も北岸の居住域の際にあるという特徴がみられた。

これらの「際」は、いずれも集落内の土地利用において、居住域

図-7 樫根集落におけるコヤの所有関係

と耕作地・河川・海・森林の境界部という、使い勝手が悪い土地、つまり主屋用地や耕作地に適さない矮小な低未利用地が該当し、こうした土地にコヤが建てられたと推察することができる。耕作地、宅地、コヤ用地の平均面積を集落毎に算出すると、田ノ浜集落ではそれぞれ7,772 m²、612 m²、57 m²、和板集落では4,874 m²、1,222 m²、57 m²、横浦集落では1,877 m²、2,619 m²、60 m²、下原集落では3,967 m²、915 m²、48 m²、樫根集落では1,192 m²、1,077 m²、43 m²であった。このことから、コヤの立地する土地が他の土地利用に供されている土地に比べて矮小であることが分かる。

集落によってコヤの立地が異なる土地利用に隣接する要因を考えると、田ノ浜集落では居住域の内陸側の広大な耕作地を有効利用するために居住域と海との間に、和板集落では宅地付近の平地が狭小であるために各戸の宅地と森林や耕作地との間に、横浦集落では集落全体の平地が非常に狭小であるために海岸沿いに、下原集落では居住域と耕作地との間に特定の用途に使用されていない土地があるためにその空間に、樫根集落では川の兩岸の居住域がそれぞれ山際にあるため川の付近の空間に、というように各集落の地理的条件や空間構成の違いが要因となっていることが推察される。

共に広い耕作地を持つ田ノ浜集落と下原集落だが、海に面する田ノ浜集落では海岸沿いに空地があることが、下原集落と異なりコヤの群倉立地がみられる要因となったと推察される。また、共に居住域が川を挟む形で位置している和板集落と樫根集落だが、川沿いの土地利用によって異なるコヤの立地形態がみられる。このように同様の条件を持つ集落においても、集落の立地や土地利用の差異がコヤ立地の差異につながっていると言える。

(2) コヤの所有と立地の関係

5つの現地調査と3つの既往研究⁵⁾¹¹⁾¹³⁾から、コヤの所有と立地を分類し、図-8のように整理した。単独立地は1)宅地内立地型、2)宅地向かい立地型、3)遠方立地型に、群倉立地は4)宅地向かい立地型の集合による群倉立地型、5)遠方立地型の集合による群倉立地型の計5類型に分類された。宅地内立地型の和板集落で

は、宅地内にコヤを所有する事例が多かった。宅地向かい立地型の下原集落では、コヤを主屋の近隣の土地あるいは離れた土地に1棟ずつ所有する傾向がみられた。既往研究の安神の一部もこの類型に当てはまった。遠方立地型の田ノ浜集落では、コヤを宅地から離れた土地に複数棟分散して所有する事例が多かった。宅地向かい立地型の集合による群倉立地型の樫根集落では、コヤを宅地の道向かいを中心に近隣の土地に1棟ずつ所有する傾向がみられた。既往研究の志多留の一部もこの類型に当てはまった。遠方立地型の集合による群倉立地型の横浦集落では、宅地のある居住域とコヤの集合する領域とが明確に分かれていた。既往研究の木坂と舟志と安神の大部分と志多留の一部もこの類型に当てはまった。以上から、調査対象の5集落および既往研究の4集落(舟志・志多留・木坂・安神)におけるコヤの立地と所有の関係について、コヤの立地と所有の関係の一致が容易に確認できる宅地内立地型以外のコヤの立地類型についても、コヤの立地の特徴は所有実態からも説明可能であることが推察された。すなわち、コヤの立地調査から抽出された5つの立地類型について、各類型の代表例である集落におけるコヤの所有調査結果によって、改めてその妥当性を確認することができたと言える。

今回の調査から、コヤの立地や所有に関して共通性と集落毎の多様性が確認された。共通性としては、上島に位置し共に沿岸集落である田ノ浜集落、和板集落、横浦集落においても、また下島に位置し共に内陸集落である下原集落、樫根集落においても穀物倉庫であるコヤが分布している上に、どの集落でも半数以上の家

図-8 集合形態と主屋との位置関係によるコヤの立地類型

がコヤを所有していることが挙げられる。このことから、対馬全島の集落においては立地条件に関わらず農業を生業として営んでいることが分かる。一方、集落毎の多様性としては、主屋とコヤの位置や所有関係が集落毎に異なっていたことが挙げられる。その要因としては居住域や耕作地との位置関係によってコヤを建てることができる土地が集落によって異なっていたことがある。

(3) 群倉の成立要因に対する諸説と本論文における考察

本稿冒頭で述べたとおり、対馬のコヤの特徴のひとつとして「群倉」が挙げられ、既往研究でも群倉に関する論文は複数存在する。本研究では、主屋とコヤの所有を紐付ける調査を行い、またこれまで単独立地型の田ノ浜集落と和板集落、下原集落を調査することで、これまでの研究では注目されてこなかった所有という観点から主屋とコヤからみた単独立地型のコヤの立地の特徴を明らかにすることができた。これまでの研究では群倉は防火や聖域が理由だとされてきたが、所有からみた主屋とコヤの立地を考えると、集落のなかで主屋や耕作地に適さない矮小で他の利用を行い難い低未利用地に、主屋に収納しきれない物品を収納するための倉庫を建築したに過ぎず、こうした土地がバラバラに存在する集落では単独立地型のコヤが展開し、こうした土地がまとまって存在する集落では群倉立地型のコヤ群が展開したと推察することができる。また、各集落におけるコヤ用地と地形との関係を寄り辺の要素からみると、田ノ浜集落では海、和板集落では耕作地、横浦集落では海と森林、下原集落では耕作地、檜根集落では川がコヤ用地の寄り辺となっていることが現地調査で確認された。

上述したように居住域と耕作地・河川・海・森林の境界部という使い勝手が悪い土地、本論文における「際」は、一律ではなくいずれも集落の地形や土地利用に制限を受けて存在している。その「際」が、あるときは河川沿いの土地や居住域から離れた土地にまとまって存在した場合は、結果として防火性が高まり、収納物を家事の被害から守る効果を発揮していた。またその「際」が、森林と居住域の境目にまとまって存在した場合は、その場所がハレとケを分ける聖域と重なっていたため、そのような論が成立したのだと推察される。

これまでの研究では「なぜ群れて建てるのか」という方向性からの議論が主だったが、本研究では「群れたのは結果である」ことを導き出した。例えば、本研究で扱った檜根集落のコヤは群倉立地という分類になるが、主屋とコヤは河川(現道路)を挟んで対面しており、コヤと主屋の各々の所有者との関係が主要である。これは、コヤを群れさせて建てるというコヤ同士の横の関係ではなく、各々のコヤの所有者が所有する土地同士の関係をコヤの成立要因とするものである。

対馬のコヤの特徴は、地形の制約のもと、耕作地、河川、海、森林などの土地利用が展開するなかで、生業や日々の暮らしのなかから「コヤ」への要求が生まれ、主屋や他の土地利用との関係からコヤの立地が定まり、結果として単独立地や群倉立地といった立地形態の多様性が生じてきた結果、現在の対馬の集落景観とコヤ立地が成立していることにある。

5. 結論

本研究では、これまで主屋とコヤの所有を紐づける調査が行われてこなかった集落を対象として、コヤの所有と土地利用の側面から集落内のコヤの立地を分析し、対馬におけるコヤの立地要因を「際」に起因する結論を導いた。コヤの立地形態には単独立地と群倉立地の2つがみられたが、コヤの立地要因が集落毎の地理的条件や空間構成に大きく影響を受けていることが明らかになったと言える。対馬におけるコヤの立地は、時間をかけて集落ごとの特徴となり、対馬の気候風土や地形や生業と相まって、島全体としての共通性や集落ごとの相違点を生み出している。これまで文

化財行政においてコヤは特に石屋根に着目されながら単体の建築物としての保全に力点が置かれていたが、本研究によって、コヤという建築物の文化的価値は主屋、耕作地、森林、海や川などで構成される集落景観という観点から評価することが可能であるということが示された。このことは、文化的景観の重要な要素としてコヤを評価する視座が示されたとも言えることができる。これは対馬におけるコヤ研究の発展に寄与する成果ともいえる。

謝辞: 本研究は、平成30年度対馬市学術研究等奨励補助を受けた。対馬市しまの力創生課の前田剛氏からは研究支援をいただいた。この場をお借りして御礼申し上げる。また、調査対象集落の皆様にも多大なご協力をいただいた。深く御礼申し上げます。

補注及び引用文献

- 1) 小林久高・安藤邦廣(2009): 対馬の民家における平柱構法の特性ーホンヤ・ウマヤ・コヤの構法の比較検討ー: 日本建築学会計画系論文集74(641), 1547-1554
- 2) 釜床美也子・安藤邦廣・小林久高(2008): 石の種類と生産組織から見た対馬の石屋根構法: 日本建築学会計画系論文集73(631), 1891-1898
- 3) 釜床美也子(2014): 対馬の石屋根施工法ー相互扶助による採石と施工ー: 日本建築学会技術報告集20(46), 1075-1078
- 4) 小林秀輝・藤田直子(2017): 長崎県対馬における石屋根の倉の分布と残存状況の実態に関する研究: ランドスケープ研究80(5), 531-536
- 5) 濱定史・安藤邦廣・黒坂貴裕・小林久高・釜床美也子(2005): 対馬のコヤの群倉立地: 日本建築学会大会学術講演梗概集689-690
- 6) 椎根集落の石屋根のコヤ1棟が「椎根の石屋根倉庫」として長崎県指定有形文化財に指定されている(1975年)。
- 7) 椎根集落の石屋根のコヤ1棟が「西山家石屋根倉庫」として長崎県まちづくり景観資産(景資第2-90号)に指定されている(2007年)。
- 8) 石屋根倉庫の移築保存が行われているのは、対馬島内の万関公園(石屋根のみ)、対馬空港(石屋根のみ)、対馬グリーンパーク(石屋根のみ)、鮎し公園(石屋根のみ)、および島外の福岡県福津市宮地嶽神社民家村自然広苑、熊本県玉名郡和水町肥後民家村、大分県由布市九州湯布院民芸村である。
- 9) 小林久高 *et al.*(2007): 対馬における「コヤ(板倉)」の建築構法の特性: 日本建築学会技術報告集13(26), 699-704
- 10) 安藤邦廣・樋口貴彦・濱定史・刈内一博・小林久高・黒坂貴裕(2005): 民家建築における板倉構法の変遷と地域特性に関する調査研究: 住宅総合研究財団研究論文集32343-354
- 11) 村田明久(2000): 対馬の伝統的集落空間に関する研究: 日本建築学会研究報告(39), 65-68
- 12) 岡秀一・青山高義(2014): 大地の遺産としての対馬: E-journal GEO9(1), 44-49
- 13) 伊地知寿子・菊池成朋・内田貴久(1994): 集落内の共有空間: 日本建築学会大会学術講演梗概集1307-1308
- 14) 伊地知寿子・菊池成朋・内田貴久(1995): 土地所有からみた集落空間: 日本建築学会研究報告(35), 97-100
- 15) 松永達・高見敬志・永田隆昌(1995): 群倉を形成する対馬集落の空間構成と聖性: 日本建築学会計画系論文集(473), 169-175
- 16) 本研究と同じように主屋とコヤの位置を所有者によって紐付ける調査を行ったのは文献5と11と13だが、文献5と11では1集落、文献13では2集落でのみその調査が行われている。著者らが調査を行った集落を対象とした理由は、著者らがこれまでにに行った対馬のコヤの全島調査から判断した結果であるが、それは主屋とコヤの位置(単独か群倉か/主屋に近い/遠い)で類型化できるという仮説に基づく。一方で所有者の主屋とコヤの位置を知る調査はある意味個人情報公開にあたり、その調査に協力する集落には限りがあるのも実情である。そのような制約の中からもこれらの代表的パターンを有している集落を優先して扱った。
- 17) 田ノ浜集落については文献9では群倉があると言及されているが、群倉の定義が示されておらず、何をもって群倉とするかについて明らかにされていない。著者らは群倉について「宅地外に連続的に立地する3棟以上のコヤの集合」と定め、その定義に基づいて田ノ浜集落には群倉は存在しないとした。
- 18) 土地利用図の作成に用いた空中写真は国土地理院地図・空中写真閲覧サービス<<https://mapapps.gsi.go.jp/maplib/Search.do#1>>を利用した。
- 19) 土地利用図の作成に用いた地形図は長崎県発行5万分の1都道府県土地分類基本調査地形分類図(三根・佐須奈1987年発行、巖原・仁位1986年発行)を利用した。